

ベルナール・ビュフェ

2017.2.28 渡邊敏幸

生涯[編集]

1928年パリ生まれ。多忙の工場経営者の父のもとに生まれ、父親との関係は希薄であった。心の支えであった母を10代で亡くし、ひとりキャンバスに向かうことが多かった。[1943年](#)、パリ国立高等芸術学校に入学。[1948年](#)、パリで最も権威のある新人賞・批評家賞を受賞。この頃から天才画家として有名であった。硬質で鋭く太い針金のような輪郭線、モノトーンに近い色彩を特色とする独自の様式を築き、その画面には人物の不安げな表情などとあいまって第二次大戦後の作者の不安で荒涼とした心象風景が表されている。女性像のモデルは多くの場合、妻のアナベルである。油彩画のみならず、優れた版画も多く制作している。[1971年](#)、レジオン・ドヌール勲章を受章。[1974年](#)、アカデミー・フランセーズ会員となる。最愛の妻アナベルと生涯を添い遂げる間も彼の孤独が癒えることはなかった。晩年には[パーキンソン病](#)を患い、71歳で自らの命を絶った。

ビュフェはあまりにも早い時期に名声を得すぎたためか、後年の作品にはややマンネリ化の傾向が指摘されるなど厳しい見方もある。日本には早くから紹介され、[静岡県長泉町](#)には彼の作品のみを収蔵・展示するベルナール・ビュフェ美術館が[1973年](#)開館した。

ベルナール・ビュフェ美術館

星瑠璃子（エッセイスト）『小さな個人美術館の旅』（27）より

私はどんな花よりも、葉を落としてたつ冬の木に魅かれる。美術館は、そんな木々に囲まれた白亜の外壁に黒々と書かれたビュフェの筆跡がただひとつの装飾である超モダンな建物だった。中へ入ると、まずは自画像の部屋である。「ビュフェ以前のビュフェ」ともいうべき初期の作品から、あの刃物で切り付けたような黒の輪郭線で描いた自画像まで、余分なものはすべて削ぎ落としたといった風情で並んでいた。それはなんと陰鬱で、荒涼として、しかも清冽な絵だったろう。贅肉、というよりは肉そのもののまったく感じられない。やせこけた身体、

極端に長い手足、どこを見ているのかわからない無表情な黒い目で突き刺すように迫ってくるこんな自画像を、他にだれが描いただろうか。

自画像のスペースを導入部として、次の部屋からは初期、すなはち、ビュフェが世に出た戦後間もない40年代の作品から、50年代、60年代・・・と、広大な美術館のほとんどすべてを使って90年代まで続く時代を追っての展観だが、初期の作品をこんなに一度に並べてある。

1947年の「風景」は19歳の作品だ。どこか知らぬ海辺の、心の底まで凍りつくような景色である。羽をむしられた丸裸の鶏が黒い机の上に投げ出された「二羽の鶏」はその翌年の作品。これも皮を剥がれてさかさまに吊り下げた牛と、それを見つめる半裸の少年を描いた「肉やの少年」は、その翌年の作品で、いずれも色といえば灰色と黒と白だけ。

その時期の彼にとって、ほかの色はなかったのだろう。後の「黄金の時代」や「紫の時代」「赤の時代」など華麗な色彩をうかがわせるものには片鱗もない。

1928年、ベルナール・ビュフェはパリに生まれた。11歳の時第二次世界大戦が始まった。連合軍によってパリがナチス・ドイツからようやく解放された時、彼は16歳だったが、その年、ただ一人の理解者だった母を脳腫瘍で失う。登校拒否で、中学すら中退状態になってしまうような少年ビュフェを理解し、占領下のパリで、夜間講座のデッサンを習わせたり、苦しい暮らしの中で官立の美術学校へ入れてくれたりした母だったが、母が亡くなると、少年はその美術学校も中退してしまう。

年譜によれば、ビュフェの画家としてのスタートはその2年後の46年、サロン・デ・モワン・トランタン（30歳未満展）に出品した「自画像」となっているから、それがいま目の前にあるものの一つなのだろうか。翌年、早くもはじめての個展が開かれて、出品作「羽をむしられた若鶏」がパリ国立近代美術館の所蔵となり、翌48年には20歳で国内最高の賞である「批評家賞」を受賞、貧しい無名の少年にすぎなかったビュフェはまさに彗星のごとく戦後のフランス画壇に登場したのである。

戦争の終わったばかりの荒廃したパリで、これらいつさいの虚飾を排した作品がどれほど、人々に深い共感をもってむかえられたか、どんな説明を聞かなくてもよくわかる。

それはパリにかぎらず、この過酷な時代を生きた世界のすべての人々に同様に、ビュフェ美術館を創設した故岡野喜一郎氏もその一人だった。28歳で終戦を

迎えた氏はビュフェとの出会いを次のように記している。

「私は、感動して彼の絵の前に呆然と立ちつくしたことを思い出す。研ぎ澄まされた独特のフォルムと描線。白と黒と灰色を基調とした沈潜した色。その仮借なさ、匕首の鋭さ、悲哀の深さ、乾いた虚無、錆びた沈黙と詩情。そこに私は荒廃したフランスの戦後社会に対する告発と挑戦を感じた。当時のわれわれ青年をおおっていた敗戦による虚無感と無気力の中に、一筋の光芒を与えてくれたのが、彼の絵であった。

国土を何回も戦場にし、占領され、同胞相殺しあったフランス。その第一次世界大戦の激しい惨禍ななかから、このような感受性と、表現力を持った年若き鬼才が生まれ出たことに畏怖の念をいだいた」

後に駿河銀行の頭取となる岡野氏は、私財を投じて1点また1点と作品を集め、1973年世界ではじめてこの膨大なコレクションによるビュフェ美術館を開いたのであった。パーキンソン病になりながらもビュフェは何度も足を運んだ。

『ビュフェ美術館の特徴』

- ・1973年 銀行家岡野喜一郎（駿河銀行の常務取締役）により創設
- ・ビュフェの作品2000点を集めた大美術館（二番目はスイス所蔵の数十点）
- ・正面のクスノキと入口脇に設置された「蝶」の彫刻は美術館のシンボル
- ・岡野喜一郎はビュフェの作品について「彼の線が構成する画面には思想がある。マチスの装飾性、シャガールの夢想性などには時代の思想というものはない。それらは彼等の職人的昇華の結果であって、そこには時代の証人といえるような哲学的、世界史的な発想はない
- ・美術館は菊竹清訓により設計（江戸東京博物館）

『ヴァンジ彫刻庭園美術館』

- ・イタリアを代表する具象彫刻家。世界で唯一の個人美術館
- ・ミケランジェロの再来と言われている。

『井上靖文学館』

（井上は岡野と沼津中学で同窓）「闘牛」で第22回芥川賞を受賞。毎日芸術賞の「敦煌」「楼蘭」日本芸術院賞「氷壁」「しろばんば」

ビュフェの作品



[Yahoo!検索\(画像\)](#)



クレマチスの丘散策と名画鑑賞

実施日 3月6日(月) 三島駅北口10時30分集合

* 遅れる方は連絡下さい * 当日雨天時は検討(例. 決行か一週間延ばす)

* 美術館等では学割の可能性あり 専攻科在籍の方は学生証持参

1 東京駅⇒三島駅 (新幹線・こだまで1時間)

時刻表

| 東京発 | 三島着 | 交通費 | 片道 | 約4000円 |
|-------------|-----------|-----|----|--------|
| ・ 8 : 5 6 | 9 : 5 7 | | | |
| ・ 9 : 2 6 | 1 0 : 2 4 | | | |
| ・ 9 : 5 6 | 1 0 ; 5 7 | | | |
| ・ 1 0 : 1 8 | 1 1 : 2 4 | | | |

2 (無料シャトルバス時刻表)

J R 三島駅⇔クレマチスの丘行き[J R 三島駅北口]発

| | | | | | | | | | |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| (時) 時間 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| (分) 平日 | 40 | 40 | 40 | 00 | 00 | 00 | 00 | 00 | 00 |

- ・ 乗り場は、J R 三島駅北口 (新幹線側) ロータリー3番乗り場
- ・ J R 三島駅⇔「クレマチスの丘」の所要時間は約25分
- ・ 停留所/J R 三島駅北口→クレマチスの丘→ベルナール・ビュフェ美術館の順で止まる
- ・ クラマチスの丘バス停からベルナール・ビュフェ美術館までの所要時間は5分